

# 傍聴

源 桃子

久しぶりに熱い議論を聞いた気がした。ここはある公共の温泉施設の大広間。友人ら数名が帰り、私はひと風呂浴びたくて残った。

私の椅子から三メートルほど離れたテーブル席に男二人、女一人の三人組が座っている。声高な議論に嫌でも私は耳をそばだてた。

三人はどうやら県庁の職員のようなのである。五十才台後半の親しい間柄と思える。話は米国の大統領に就いたばかりのトランプや安倍首相、国内外の貧困問題、教育問題にまで及ぶ。アルコールの扶けもあつて激論は、二百名以上も収容出来る大広間の隅々まで届くほどの声量である。

定年間近と思しき女の傍らには高級ブランドのリュックサックと手提げカバンが置いてある。男Aを中心に男Bと女がそれぞれの持論を展開させている。話が面白くて私は彼らのテーブルの近くまでじり寄って行った。

「そんなことを言う貴女とは私はもうお付き合いする

気はありません」

と、男Aが言うと、女は職場での事例を挙げ、男Aに食い下がる。男Bはどちらの肩を持つでもなく、頷いてばかりいた。私にはどちらにも正論のように聞こえないでもなかった。

男Aが、

「格差社会、特に貧困を生んでいるのは安倍内閣の悪政のせいだ」

と唱えると、女は間髪を入れず返す。

「腰痛をはじめ身体の痛みを訴えて国を欺き生活保護を受けている奴らが許せない」

「子供たちに教育の機会を均等に与えて学力を身に付けさえすれば、彼らの国への貢献度は高まるのに、親が貧しいというだけで進学を諦め、望むような仕事に就けないような国の施策の方が許せない」

と男A。

女Aが続ける。

「例えば、毎年のように子供を産み、七人もの子持ちの夫婦が生活保護費として国から三十五万円を貰って生活し、親は腰痛を理由に仕事に就こうとしない。医者

者の診断書より本人の訴えが優先されているのが現状

なのよ」

女は激昂のあまり声を震わせている。前に垂らした髪には白いものが目立つ。

同じ県庁の長年の同僚にしても、両者の見解には水と油ほどの相違があること身近に接し、何故だか私はほっとした。

男Aの話には、何もかもが順調で今この年まで生きて来られた自分が嫌で腹立たしい、などという自己嫌悪のような響きがあり、公務員にありがちなしたたかさは感じられなかった。一方、女の方の考え方には貧者を蔑み、敵視しているかのような印象を与える。少なくともそんな誤解をされがちな危険を孕んでいると感じさせるものがあった。

両者の激論は平行線のままであったが、大筋では似ているようにも思えた。

四合瓶の底の余滴を盃に垂らしながら男Aは、「私はカミさんにも口でいつも負かされている」と呟く。

コーチのバッグをこそそそしながら女は帰り支度を始めた。

「こういう話になることって珍しいですよね。私はお二人のことをこれから大事にしたいと思っっているん

ですよ」

と、男Bがやっと言葉を発した。良く透るさわやかな声だった。

アルコールの功罪を語れば、この温泉施設で垣間見た男女のやり取りは『功』かも知れないと私は思った。

(2017・2・16)

